

## 巻頭言 「砦」

宇野 元

以前月報に記したヘルマン・ヘッセの言葉が思いだされます。「シリアスなことをシリアスに受け取ることを学べ。そして他のことは笑い飛ばすことを学べ。」悩めるおおかみの前に、モーツァルトがあらわれて諭します。おや、どうしたんだい、ばかにまじめくさっているじゃないか。ほら、雑音だらけのラジオからも、耳をすませば素晴らしいヘンデルの音楽が聞こえるだろう。現実を悲観し思いつめる心に、傍らにあるよいものに気づくようさそいます。

それから、マリリン・ロビンソンの言葉が思いだされます。「現代は、シリアスであることを何かと避ける時代だ。シリアスであることの喪失は、希望の喪失であるように思う。」シリアスであることを避ける時代は、軽いものを志向する。軽い楽しみ。軽い人生。軽い言葉と軽い行動。そこで今の責任が疎かになってしまう。

二ヶ月前、ドイツのアンゲラ・メルケル首相が、国民に向かって呼びかけるのを視聴しました（3月18日ARDテレビ）。——治療法も、ワクチンも今はありません。けれども、パニックにならないようにしましょう。また、自分は大丈夫と高を括ることもないようにしましょう。誠実に理性的に行動して、命を大切にしていることを実証する必要があります。印象的なスピーチの中で、シリアスという意味のドイツ語がくりかえされていました。「シリアスに受け取りましょう！」

世界と日本が苦難に直面しています。最新の知識と技術を超える出来事とともに、今、現代の人間の心に、シリアスな問いが大きく示されているといえるでしょう。私たちの命は、誰の手の中にあるのか？ 明るい日も、暗い日も、しあわせを感じる時も、突然困難がふりかかるときも、私たちは神との関わりの中にあります。とりわけ、人生と世界の謎にぶつかるとき、御前に置かれていることに心をひらくよう招かれています。包まずに不安を申しあげ、支えられたいものです。「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる」（詩編46, 2）。

そう信頼し、ゆだねることができるのは、神の手が愛の手であることが、御子の苦難と勝利によって証されているからです。イエス・キリストを仰ぎましょう。ここに「砦」が存在しています。そして、パンデミックの脅威のなかで、自らの持ち場においてどう行動するのがよいかを考え、選択し、実行する力、愛、落ち着いた心を賜りましょう。